

『寒苦鳥』

三回生
住中道照

仏教説話のなかに「雪山の寒苦鳥」の譬がある。

寒苦鳥というのはヒマラヤの山中に住む想像上の鳥であるが、夜の寒さに堪えかねて、このような寒さにも温かい巣があったら助かるのにナ、と思っても鳥のことで、夜は眼が見えない悲しさに巣を作ること叶わず、一晚中寒さに震えながら、マンジリともせず、「夜が明けたら巣を作ろう、巣を作ろう」と鳴き明かすそう。ところが夜が明けて、ポカポカと陽がさしはじめると、一晚中寒さに苦しめられ眠れなかった寒苦鳥は、温かさにツイとうとうと眠りはじめ、うつらうつらと快い暖気に包まれて、一日を過してしまふ。もちろん空腹をいやすために餌あさりはずだろが、腹の皮がツツパルと当然又睡くなるという始末で、遂に巣を作ることなくして寒い夜を迎え、又々寒さに責められるという状態で、ついに死ぬ迄巣を作ることができなくて夜の苦しみを続けるということである。日中僅かな時間を巢作りで費やせば、夜の苦しみをしなくて済むものをと。

我々凡夫の境涯を指している。このことを日蓮上人は、『……はかなき世の中に、但昼夜に今生の貯をのみ思い朝夕に現世の業をのみなして、仏をも敬わず法をも信ぜず無行無智にして徒らに明し暮して、閻魔の庁庭に引き連れられん時は何を以てか資糧として三界の長途を行き、何を以て船筏として生死の曠海を渡りて実報寂光の仏土に至らんや(中略)人久しといえども百年には過ず、其の間の事は但一睡の夢ぞかし、受けがたき人身得て適ま出家せる者も、佛法を學し謗法の者を責めずして徒らに遊戲難談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生なり云々』(松野殿御返事)と教示されている如く、寸暇を惜んで学問修行に励まねばならないのは当然であるのに、目先の多忙に追いつまわられて、ついウカウカと怠り勝ちで一生空しく過すことになりかねないのは、寒苦鳥と大差ないものである。

現代社会と宗教
牧達玄
戦後、我国は経済的に非常に発展し、世界で屈指の先進国となった。それは我々の日常生活を見てもよくわかるであらう。なに一つとして不十分なものはないといっても良い程である。しかし、よく考えてみるならば、それは物質的な面においては十分であると言いつて精神的には十分であるとは言いつて切れない。むしろ、このように巨大化された社会、即ち全てのものが計算的・合理的・科学的に造られた社会において、精神的な面での発達が必要に遅れている傾向が強いと言わねばならない。経済的に非常な発展をしたため、我々人間の生活は一応、安定したかに見えるが、それは表面的なものに過ぎないであつて、その本質的な面、即ち精神的な面での発達に欠陥があるため絶えずなにか、内面的には不安定な状態でしか生活できないのである。ここにマルクスの唱えた唯物史観の欠陥の一つを見ることができる。

人間が文化的な生活を送る場合、物質的なものだけではだめなのであつて、やはり、そこに精神的な面、即ちヒューマニズムなるものが必要とされるのである。これが欠けるならば、人間は不具者として生活を送らねばならず、やがては自己崩壊を導くであらう。それならば、このように発達が遅れている精神面を立て直し、人間生活を安定させるものは、一体なんであらうか。

現在、我国で開催されている万国博のテーマは「人類の進歩と調和」である。このテーマの前者、即ち進歩的な面は、これを科学が受け持つとするなら、後者、即ち調和は、やはり宗教がこれを受け持たねばならない。ところが現在の世の中では進歩、それも物質的な進歩のみが先行し、調和、即ち物質的な進歩と精神的進歩がうまく噛み合った状態においての調和が軽視されがちである。

もし人間がその本性に基づき、身心ともに健康なる生活を送らうとするならば、調和のとれた進歩、即ち調和の中に位置づけられた進歩が必要なのは言うまでもない。現代のこのアンバランスな時代においてこそ、このような調和、特に真の調和なる宗教が必要とされるのであつて、これなくしては、人類は崩壊の一步をたどると言わざるをえないであらう。

ところで、このように宗教が必要とされるならば、そこにはやはり、信仰心の問題が考えられねばならないだろう。私はこの問題を学問と対比することによって考えて見た。

学問と信仰ということについては現在種々の意見が交わされているが、私は、この二つは相対的であり且つ融合的であると思う。学問を追究するものは、とすれば自己満足的な傾向に陥入り、信仰面を忘れがちである。しかし、それでは真の学問であると言ふ訳にはいかない。何故なら真の学問とはそれを追究することによって人間生活に光を与えるものでなくてはならず、そこに必然的に信仰というものが生まれてこなければならぬからである。学問とは、単に利益、名譽、地位を目的とする利己的なものではない。

ところで、信仰の面から考えると必ずしも信仰者が学識豊かな人間ばかりであるとは言えない。現代社会の敗退者の中にも、あるいは田舎のお百姓の中にも信仰心を持った人がいるかも知れない。むしろ、そういう人達の方が豊かで且つ真の信仰心をもっているのではないだろうか。

「素朴な信仰」を。

私はこの素朴な信仰こそが真の意味の信仰であると思う。しかし、信仰は各人別々のものであるから一概に決めつけることはできない。といふことは、学問によつて信仰が何であるかを追求することは出来ないものであつて、学問することによつて、自ずと信仰心が芽生えてくる、換言すれば、学問は信仰心を起す一つのきっかけのようなものだと思う。だから、学問と信仰は混同されてはならないし、又、切り離して考えてもいけないのであつてその両面を備えているものであるから、相対的、且つ融合的であると考えられるのである。